

ま」の中に、愛情というものは、その対象物のために費した時間によって計られるものだという意味の事が書かれていますが、確かにそれで、いくら立派なものでも簡単に手に入ったものに対しては愛情はわからない。しかしどんなにみずほらしいものでも、それが何日も精魂こめて作ったものであれば、それはとても大切なものになるんですね。

さて、肥後守でどんなものを作りましたか？

坂場 いろんなものを作りましたが、覚えていられるのも篠鉄砲とか、竹トンボ、馬鹿ゴマというようなものを作りましたね。特にコマを作るのにはカヤの木がいいんで、つまりうなりがいいんですね。その頃はだからどこの山のどの辺にはどんな種類の木があるってことがちゃんと分ってました。極端に言えば、この木のキズはいつ誰がつけたのか、というような事も解ってました。そこで今日はコマを作ろうということになるとみんな山へ入って行って、鋸で切って、神社の境内とかお稲荷さんの階段とかにみんな腰を下して、それぞれ思い思いに肥後守で削って作りあげて、心棒は篋で作って、紐も自分で編んで、そして出来るとみんな誰が一番良く回るかという競争をしましたよ。これはとても印象に残った遊びでしたね。

佐賀 坂場さんの話を聞いていて、私の子供の時分もそうだったと思いついてるんですが、考えてみると、いまの子供達とは全く本質的に異う遊び方をしていたといえるかもしれませんね。材料を取りに行くにも、自分の領分の山に入っていく。そしてめいめいが取ってきた材料で、夫々の個性を生かした遊び道具を作るわけでしょう。ところが今の子は、おもちゃというところ、金銭と結びついているし、しかも画一的なものしか手に入らない。

坂場 全くですね。私の子供時分には、お金を使っておもちゃを買うという事は考えなかったですね。遊びに必要なものは自分で作って遊ぶという以外は想像もしてませんでした。例えば、舟遊びをするにも、まず板切れを持ってきて、それをナイフで刻んで、帆をかけて流れに浮べる、という具合でしたね。

## 二、竹トンボなど

佐賀 竹トンボなどというのは、今だって作って作れないことはないのに、遊ばない。これはどうしてでしょうね。

坂場 材料がない、ナイフを持たせないということの他に、環境の変化が大きく影響しているんじゃないかと